

私たちの教会を考える

—今、改革の時を迎えて—

【第14回】若者たちは動いている

■福岡教区司祭 山元 眞



福岡教区カテドラル

若者たちは教会に来ない？

「若者の教会ばなれ」といわれて久しいが、教会から見れば、のことであって、若者たちから見れば、教会が若者から離れているように見えるのかも知れない。おそらく多くの教会では、委員会などでこの議題が話し合われ、悩みの種になっている。ときどき相談されることがある。「神父さん、どうしたら若者が教会に集まるんでしょうか」そのときは、きまってるように答えることにしている。「自分たちだけで考えたり悩んだりしないで、若者たちに直接聞いてみたら？」

根本的な問いかけが必要だろう。まず、大人たちが考えてみなければならぬ。なぜ、若者が教会に来ないといふって悩むのか。若者が教会に来ないといふって悩むのか。どうして教会に集まらなければならぬのか。大人たちは、どのような答えを出すのだろうか。ミサは信者の義務だからというのだろうか。ミサに来なければ大罪だから、そのまま死ねば地獄にいくぞ、というのだろうか。若者自身が、その必要を感じたり、ミサの素晴らしさを実感しなければ、教会には来ないだろう。考え

てみれば当たり前のことである。

若者たちに聞いたことがある。「どんな教会だったら来る？」「どんな教会だったら来たいと思う？」

《教会は暗すぎる。ミサはもつと明るく。説教は若者が聞いてもわかるように話してほしい。実生活と関わりある福音を説いてほしい。友だちを呼べる教会（ミサ）であってほしい。外見だけで人を判断してほしくない。きめつけが多すぎる。一部の人のだけで教会を動かしている。みんなの教会、だれでも来られる教会であってほしい。教会の中にあるような差別がある。障害をもっている人のことなど考えていない》

若者は若者なりに教会のことを考え、想っている。こうあつたらいい、という理想像をもっている。それを聞く場もないし、話す場もない。彼らに聞いてみると、今、教会に必要な根本的な課題が明らかになる。

若者たちのつながり

今の小教区に赴任してやがて二年になる。昨年のおまじなところだっただろうか。ミサの後、一人の青年が話しかけてきた。今度、夏に福岡で中・高生のキヤ

ンプがあるので参加を呼びかけていいですか、という話だった。その青年はほとんど毎週ミサに来ていたのだが、約一年の間、一度もゆつくりと話したことがなかった。

行橋教会は北九州地区に属し、福岡地区とは離れている。ちなみに行橋から福岡まで七〇キロメートルはある。福岡地区の青年が中・高生を集めてキャンプを企画したのだが、それに参加したいという。知らないところで青年どうしがつながっていることにまず驚いた。地区を越え、小教区を越えて若者たちはつながっている。このキャンプに行橋教会から八人の青年と中・高生が参加した。

つながる方法はメールだ。アドレスを教え合い、互いに会わなくても簡単に連絡がとれる。話を聞いてみると、メッセージングリストができていて、それがどんどん増えていき、それに伴って若者同士のつながりも強くなっているようだ。メールで情報交換をし、活動を紹介し、参加を呼びかける。福岡では、青年たちが自主的にいろいろな活動を始めた。炊き出し、町中の公園でキャンドルを灯して平和をよびかける「キャンドル・アクション」やスポーツ大会など。そのような活動の情報が



筆者



行橋教会

福岡教区
 信者数 31,881人
 信者率(人口比) 0.412%
 教区司祭数 33人
 修道会司祭数 56人 修道女 413人
 (2002年版カトリック中央協議会資料より)

直接に個人に届く。

先のキャンプにしても、半年の間にメールが行き交い、それを通じて準備が進められていった。キャンプが始まる前に互いの教会を訪問し合ったりして交流を深めることができた。隣の教会よりも他の、遠い教会との付き合いが深くなっていった。若者たちにとって距離は関係ないようだ。いくら遠くても、つながりができれば一緒に活動することができると。

メールの効果

このように、メールの効果は大である。福岡でのキャンプは、ある青年の思いがきっかけで実現した。この青年は中・高生時代に教会で楽しい思い出をたくさんつくることができた。今、教会に中・高生の活動の場がないのに気づき、何とかして教会の楽しさ、素晴らしさを伝えることができないかと考えた。そして一人、また一人とまわりの青年たちに声をかけていった。教会や司祭にまかせせるのではなく、中・高生の思いがわかる自分たち青年で企画することを考えた。仲間が増えていった。一緒に教会を訪問して司祭や信徒の理解と協力を求めた(その結

果、小教区によって反応が違うことに気づき、司祭が協力的でない教会からは参加者がないことにも気づいた)。同時にメールで友だちの輪を拡げていった。参加者は三十四人。参加の感想。「楽しかった」「この体験をとおして友だちの見方が変わったと思う」「自分には必要不可欠な存在、それが『ともだち』だと思った」「このキャンプにいた時間は自分にとって一分一秒無駄ではなかった」

このキャンプをきっかけに行橋小教区でも青年、中・高生の活動が活発になっていった。若者のミサを企画したり、キャンドルを灯して平和を祈ったり、バーベキュー大会をしたり……そして、司祭として何よりうれしいのは、主日のミサ参加者が増え、ミサ後に教会の庭で青年たちが語り合っていることである。

福岡の青年たちとのつながりは、今では北九州地区の青年たちとのつながりに発展している。さらには、長崎、大分(宮崎)の青年たちとの交流も生まれ、この冬には仙台教区まで雪かきのボランティアに出かけることになった。

情報の大切さ

「かつての青年」に青年時代の教会での思い出について聞いてみた。《自分の教会のことしか知らなかったし、他の教会で青年たちがどんな活動をしているかは知らなかった。だから交流もなかった。教会でも青年の「場」はなかったし、せいぜい行事のときにかり出されるくらい》

教会での青年活動の多くは組織の中で計画され、教区レベルでも司祭が中心となることが多い。連絡も文書で、せいぜいファックスを使ってなされるくらいで、その「紙」が掲示板に貼られているだけ。メールで情報交換している今の若者たちを見て、あらためてメールの効果と情報の大切さに気づかされた。たとえ電子メールであっても、個人的なつながり、声かけが必要であること。そこから仲間づくりが始まり、自分たちで企画、実行ができることを再認識した。

若者たちの未来は希望に満ちている。教会の大人たちはもっと若者を信頼していいと思う。

福岡のカトリック青年の個人ページ
<http://komnyaku.fc2web.com/>
 山元神父のホームページ
homepage.mac.com/makotochant

やまもと・まこと / 行橋教会主任司祭